

### 23. 高齢歯周炎患者における抗歯周病原細菌抗体の測定 —新潟市高齢者における歯周組織状態と血清IgG量の関連—

○小林 孝雄, 中島 啓介, 富岡 純,  
森 真理, 加藤 幸紀, 小鷲 悠典  
(北海道医療大学歯学部歯科保存学第一講座)

【目的】血清総IgG量あるいは血清IgGサブクラス量と歯周炎の病態との関連については、これまで多くの研究者により報告されている。本研究では、日本人において血清IgG抗体量と歯周炎の病態との間に何らかの関連があるかどうかを明らかにするために、高齢者の血清総IgG量および血清IgGサブクラス量を測定し歯周組織の状態と比較した。

【材料および方法】1. 被験者 新潟市に住民票を有する71歳の高齢者に調査依頼を送付し、その中から414名を選定し被験者とした。診査項目として、①ポケット深さ、②アタッチメントロス、③歯石の有無、④プロービング時出血(BOP)の有無、を診査した。また、各被験者から静脈血を採取し血清を分離後、測定まで $-80^{\circ}\text{C}$ で保存した。

2. 総IgG量の測定 株式会社BMLに依頼し、免疫比濁法にて血清総IgG量を測定した。

3. IgGサブクラス量の測定 マウス抗ヒトIgGサブク

ラス抗体(Calbiochem社製)をコーティングしたNunc社製イムノプレートII上で被検血清を反応させ、連続希釈したヒト標準血清の吸光度をプロットした標準曲線から各被検血清のIgGサブクラス量を算出した。

【結果および考察】診査項目と測定した血清IgG量の関連について統計処理を行った。その結果、危険率5%未満で有意であったのは、総IgG量とポケット4mm以上の部位の割合( $r=0.12, P<0.01$ )、および総IgG量とBOP(+)の部位の割合( $r=0.12, P<0.05$ )であった。また、分散分析において危険率5%未満で有意であったのは、総IgG量とポケット4mm以上の部位の割合( $P<0.05$ )、および総IgG量とBOP(+)の部位の割合( $P<0.05$ )であった。以上の結果より、血清総IgG量が高いほど、ポケットが深くプロービング時に出血しやすい傾向が認められた。しかし、IgGサブクラス量と診査項目との間には有意な関連が認められなかった。

### 24. センターにおける摂食・嚥下機能障害患者への取り組み

○関口 五郎  
(東京都立心身障害者口腔保健センター)

【目的】東京都立心身障害者口腔保健センターは昭和59年の開設以来、何らかの障害を伴った者(以下、障害者と略す)を対象に、二次歯科医療機関として歯科診療、予防相談・指導ばかりでなく、歯科保健医療従事者の養成、ならびに研修の機関としてもさまざまな取り組みを進めてきた。現在、一年間にのべ10,000名以上の障害者が患者として来所される中で、摂食や嚥下の機能に問題のある場合も少なくない。そこで当センターでは昭和62年より摂食外来を設けてこのような患者の対応に取り組んできた。そして平成11年4月からは摂食予診を開始し、またビデオX線透視(Videofluorography;VF,嚥下造影)検査装置を導入したことを踏まえ、同年7月からはVF予診を開始した。さらに摂食・嚥下をテーマとした研修会を開催するなど、研修活動も行ってきており、これまでさまざまな職種の方々が受講された。本発表ではこれま

でのセンターにおける摂食・嚥下機能障害患者への取り組みを総括することを目的とした。

【方法】センターにおける摂食・嚥下障害患者へのこれまでの対応状況をまとめ、あわせて摂食外来を受診した患者について疾患・障害別、および年齢別に分析を行った。

【結果および考察】当センターでは、これまで摂食・嚥下機能障害患者へさまざまな取り組みを進めてきており、摂食外来には一年間にのべ500名以上の患者が来所される。摂食外来を受診した患者の疾患・障害別では脳性麻痺、知的障害、ダウン症が多く、年齢別では発達期の患者が中心であった。しかし近年では脳血管障害患者など高齢者の受診も増加傾向にあり、また受診される患者の疾患・障害もその範囲が広がるなど、今後ますます摂食・嚥下機能療法に対する必要性が広がってゆくと思